

第六章

キャッシュフローと資金繰り



これまで損益計算書の見方について説明してきましたが、
だいたい理解していただけましたでしょうか？

この章では、**キャッシュフローと資金繰り**について考えてみたいと思います。

まず、**サラリーマン世帯の家計の場合**ですが、
収入は、月給の場合は毎月1回の給料日に定期的に入金があります。
ボーナスがある場合は、臨時収入として支給日に入金があります。

一方、支出は、月々の家賃やローンの支払日や公共料金などが口座振替の場合は
引き落としの日が決まっています。
そのほか、日々の買い物だったり、その都度現金やカードまたは銀行振込で
支払いをするというイメージではないでしょうか？

ここで注意するのは、毎月の収入が一定なので、支出は毎月定期的に発生するもの
と、臨時的に発生するものに分けて管理・コントロールすることが大切です。

最低限必要な経費と娯楽・レジャーなど遊びの費用を分けて考えることも大事です。
収入の範囲内で余裕を持って生活できる状態が理想的です。

とにかく、収入が決まっていますから、支出をコントロールするしかありません。

それでは次に、**個人事業の場合**はどうでしょうか？
ここでは、個人商店の取引を例にして考えてみます。

同じ取引内容で、決済方法(支払条件)が違った場合に、キャッシュフローがどのよう
に変わるのか？具体的な例でみてみましょう。

それぞれの場合の**損益とキャッシュフローの違い**を比べてみましょう。

Case 1. すべて現金取引の場合

- (1)仕入先から、商品Xを700円で2000個現金で仕入れて、
1000円で1000個現金で販売した。

【当月のP/L】		【当月のキャッシュフロー】	
売上高	100万円	売上代金入金	+100万円
売上原価	70万円	仕入代金支払	140万円
売上総利益	30万円	現金増減	40万円

このとき、粗利益は30万円儲かっていますが、現金の増減は40万円減っています。差し引き70万円の差があります。

これは、売上原価として70万円の費用が発生していますが、仕入代金として140万円現金で支払っているためです。

当月末で在庫が70万円増加するので、その分だけ現金は減少することになります。

仮に、商品を1000個仕入れて全部販売すれば、1ヵ月の期間で見れば損益とキャッシュフロー増減は同じ金額です。

ただし、キャッシュフローの入出金は厳密には、仕入が先でまず70万円支払って、販売した時点で100万円入金しますから、最初に仕入代金を払うお金が必要になります。

このように、損益(儲け)とお金の出入りは一致しません。

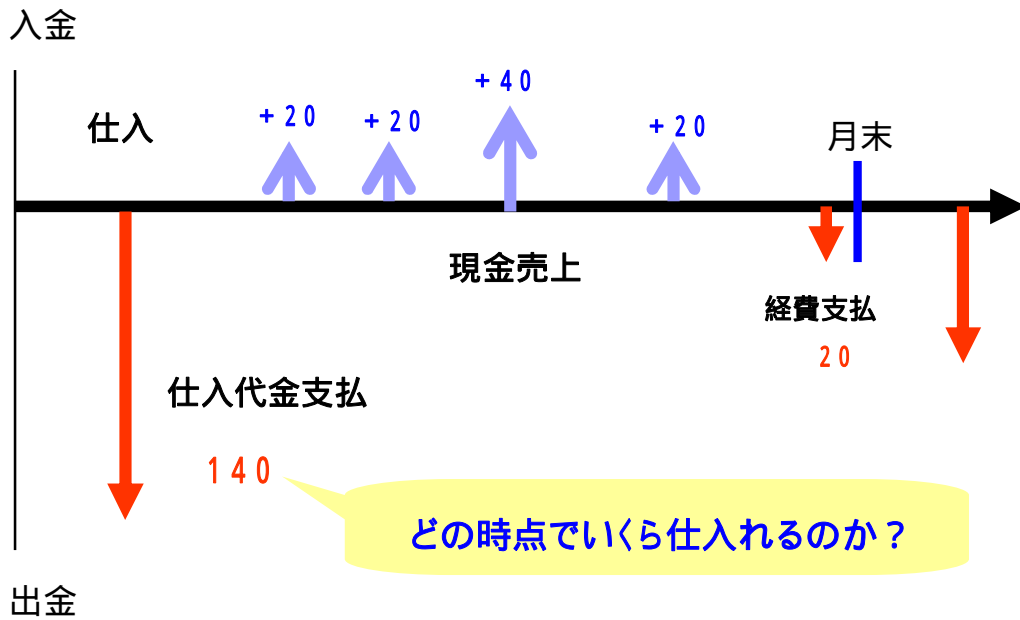
時間的なズレがあって、通常は仕入れ代金などの支払いが先行するため、在庫を保有したり一定期間の経費を支払うために資金が必要になります。

これが、いわゆる「**運転資金**」と呼ばれるものです。

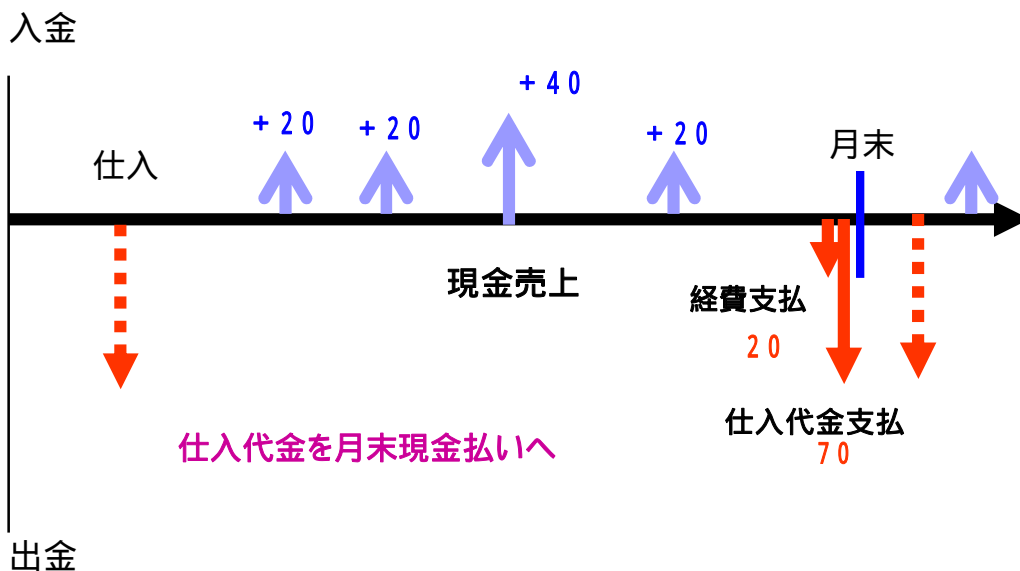
(2)月末にアルバイトの人件費、広告費、光熱費など諸経費15万円と借入金の利息5万円を支払う。

【当月のP/L】		【当月のキャッシュフロー】	
売上総利益	30万円	仕入販売	40万円
必要経費	20万円	経費支払	20万円
事業所得	10万円	営業CF	60万円

(1)(2)の取引のキャッシュフローを図で表すと、以下のようになります。



仮に、商品Xを700円で1000個仕入れて、1000円で全部現金で販売して、月末に在庫がない場合で、さらに仕入代金が月末現金払いだとすれば、以下のようなキャッシュフローになります。



いかがですか？

このように月末払いにしてもらえば、入金してから支払いが可能になります。